

---

# 鴉朱村 朱色の鳥居をくぐる者

珈落空鳥熾

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鴉朱村      朱色の鳥居をくぐる者

### 【Nコード】

N0419C

### 【作者名】

珈落空鳥熾

### 【あらすじ】

過疎化が進む鴉朱村は近々、その名前が地図上から消えるという。都会で暮らしていた二人の男女の元にある日、同窓会の通知が届く。鴉朱村出身の二人は夏休みもあり、旅行がてら向かう事にした。人里離れ、ひっそりと存在する鴉朱村で待ち受けるものは……。

## 其の一（前書き）

この度は当方の作品を手にして頂きまして、誠にありがとうございます。

## 其の一

天高くそびえる朱色の鳥居は、時を重ねたせいもあり所々色が剥がれ落ちていた。

一羽の鴉が羽を休むためか、その上へと降り立った。錆びたとはいえ、遠目に見ても映える朱色に漆黒の鴉では、対照的な印象が残る。

鴉がしゃがれた声で一声鳴く目先に、一組の若い男女の姿が見られた。鴉の止まる朱色の鳥居、その真下である。

敷き詰められた白敷石に、これまた映えるようにして佇む人の命。鴉はもう一声鳴くと、羽を羽ばたいて鳥居から離れ去った。

その空に舞う鴉の影絵が真下にいる二人の上を過ぎた時。鳥居に手をかけて、疲れたのか、その足を止める女がいた。

「霧塔、ね、ちょっと休もうよ？ 私、もお疲れたよ」

女の体が隠れる程の鳥居へ右手をかけ、前を歩く漆黒の髪をした男を呼び止める。女の弱々しい声に振り向いた男は、鳥居の側で座り込む女の姿を目にした。

男は腰に手を当てながら、丈夫な紺地のズボンのポケットから折りたたんだ地図を見開き、位置の確認をしている。

そんな姿を横目で見ながら、女は辺りの景色に目を配らせた。朱色の鳥居と、白敷石を囲むように緑がうつそうとおいしげる樹木があり、夏蝉が辺りに止まっているのか鳴き声が響く。

白い半袖の服下から吹き出る汗を拭うため、鞆から取り出した小さなタオルで、その顔や首筋などにあてがった。

入道雲が白く映えていた青空も、いつしか黄金色に染まり出している。見上げる彼方では、影絵のように鴉の一羽飛ぶ姿が見えていた。

染まり行く空に疲れが癒されるのか、女の表情は徐徐に明るくなる。今度は鞆から飲みかけのペットボトルを手に取り、その中身を喉を鳴らせて飲み出した。

「柑菜、あと少しだから頑張ってくれないか？」

地図を折りたたみ、再びズボンのポケットへ戻した男は、かけていた眼鏡を外し、胸ポケットから取り出した白い布で眼鏡を拭い出す。

再び眼鏡をかけ直した顔は、利発で端麗な面がある。向けられた視線の先にいる女を力強く見据えていた。

「あと少しって、そればかりで二時間は歩いたじゃない？」

怪訝な顔をしながら女は、左に身に付けた腕時計を指さしている。その文字盤はアンティーク調を思わせる装飾が施されており、銀に輝く秒針が動いていた。

さしている数字は十二と四を過ぎた辺り。夏の蒸し熱い温度を下げ出す時刻の十六時であった。男は少し飽きれ顔をし、女に背を向けると、朱色の鳥居先から続く白敷石の道を再び歩き始める。

腰を深くおろしていた女は、男に無視をされたのが不服とばかりに頬が膨らむ。怪訝な顔は更に強まりながらも、慌てて立ち上がり男の後ろへと駆け寄った。

「もお！ 無視しないでよ霧塔！」

夕日に照らし出された二人の影。女の天へ振り上げる手、その姿が白敷石に映り出す。

男はただ前を向き、黙々と歩き続けていた。

女の名前は天宮柑菜。夏のため、肩にかからない短目の髪をしている。黄金色に染まる空と同じく、夕日に照らし出された髪は薄茶のようだが、漆黒の髪である。

その両目は二重で大きく、美人とまでいかないが十分に可愛い顔立ちをしていた。

前を歩くのは、柑菜より二十センチ程高い長身の男である。白いワイシャツからは程良い肉付きの腕が、まくりあげられた先より見える。

名前は霧塔葵。

二人共、大学二回生の若者であり、長い夏休みを過ごす間の二・三日、旅行がてらに鴉朱村へ向かっていた。

人里離れた山奥にひっそり存在する村へ。今時珍しい無人駅から歩いて目的地を目指している。

鴉朱村は、のどかな景色と、夏の村祭りが観光地として賑わいをみせたのは昔の話になり、今では過疎化が進む一方だった。

無人駅の場合は麓になり、鴉朱村の中心は高台の位置にある。歩く間、誰を見る事も無く二人は朱色の鳥居までやって来た。

僅かな人口で耕された田園地帯が時折、樹木の間より見えている。そんな都会とは違うのどか過ぎる景色を見ながら。

二人が共に行動する理由には恋人同士である事と、夏休みとはいえ都会の遊び場や観光地ではなく、あえて“鴉朱村”に行く理由が出来たからだった。

二人共、幼い頃は鴉朱村で暮らしていた。中学を卒業する頃、村にはない高校のために地方へ柑菜は両親と共に引っ越した。

鴉朱村から高校へ通おうとすれば隣町へ行くしかなく、無人駅から二時間はかかる。

大体の家族は土地で耕す仕事か、地方で離れ暮らす事が多い。この時期を迎えると、鴉朱村を離れる姿が多くみられたという。

霧塔の父親は地方で働いて、母親の実家がある鴉朱村で過ごしていた。家には祖母がおり、三人で暮らしていたが、卒業を間近に病気で祖母が亡くなっている。高校の事もあり、暫くして母親と共に父親のいる場所へと向かった。

そんな二人が数年の時を経て大学で出会い、クラスや履修科目も重なる事があり、いつしか側で過ごす事が多くなっていた。

昔から知る顔であったためか、自然と付き合うようになったという。日々の暮らしで忙しく過ごす二人に、ある日“招待状”が送られてきた。

『鴉朱村の同窓会。鴉朱村、最後の祭りも兼ねています。鴉朱村小学校にてお待ちしています』

他にも招待状には、鴉朱村の過疎が酷くなり近々その名前も地図から消える事と、日時などが添えられて。

丁度、夏休みの日取りにあり懐かしく感じた二人は、鴉朱村へ行く事にした。お互いに都会で暮らすようになってから、鴉朱村で過ごした幼い頃の記憶は曖昧になっている。

特に柑菜は、霧塔と大学で出会うまで鴉朱村の記憶が抜け落ちていた。濃い霧が視界を妨げるように記憶が朧げで、思い出そうとす

ると偏頭痛を伴う事が多い。

霧塔は臃げな記憶ではあるが、普通に懐かしい故郷に帰る程度の認識である。

「っ！」

背後にある朱色の鳥居が見えなくなった頃、前を歩く霧塔が急に立ち止まった。よそ見をしながら歩いていた柑菜は、霧塔の背にぶつかり、その足を止めた。

顔に手を当て、摩りながら霧塔の横から前方を覗くと、道を囲むようにそびえる巨大な樹木が横に薙倒され道を塞いでいる。

見渡すと周囲では何本も横倒しになっている。時折、地震や災害の被害で、鴉朱村への交通手段が幾度かたたれていた事を、おぼろ気霧塔は思い出していた。

「他を歩くしかないか……」

柑菜の手を取り、今まで歩いて来た白敷石の道を外し、霧塔は迷う事なく森の中へ入り歩いて行く。

「な？　ちょ、ちょっと！　迷子になったらどうするのよ！」

横倒しの樹木に当たればそのまま横を歩き、終われば前に行く。そんな何処を歩くか解らないような事では駄目だと、柑菜は霧塔の掴む手を離そうとするが、強く握られたままであった。

まだ夕刻とはいえ道沿いでは明るさがある。奥深く入る森は、樹木がその背丈で光を遮り暗くなっていく。

遠のいていく道沿いの明るさを何度も振り向き見ながら、柑菜は

霧塔に言葉投げ掛けるが黙々と前を歩くのみ。

湿った土の匂いが強まり、踏みしめる小枝や枯れ葉が足元をおお  
う。時折、鴉や虫の声など森では聞こえており、不気味だと柑菜は  
その足取りも遅くなった頃。

樹木の拓けた場所が一つ。白敷石を歩く道と同じく陽の明るさを  
受けており、人の手で造られた様子の茶色で高い石壁があった。  
森の先へと続いているのか、頑丈な防壁のようである。霧塔は柑  
菜の手を離し、壁に近寄った。

壁には人の足がおけそうな錆びれた出っ張りがあり、その先を見  
上げると、人が通れそうな闇穴が一つ。

霧塔は足をかけ、上り始める。柑菜は一段、また一段と上るその  
姿を目で追う。二十段いくかどうかで霧塔は闇穴に辿りついた。

「柑菜、大丈夫だったら呼ぶから」

振り返り、真下から心配そうに窺う柑菜に一声掛けて歩き出す。  
頷き見送る先に霧塔の姿はもういない。

残された場所では風が森の樹木の葉を揺らし、強く通り過ぎる。  
一人でいるには寂しく柑菜はその声を待った。

「……柑菜！　大丈夫だ良いぞ！」

闇穴より霧塔の叫ぶ声が木霊して、柑菜の耳へ届く。安堵した柑  
菜の顔は緩み、同じく慎重に足をかけて上り始める。

闇穴は少し屈むようにして歩けば進めるようであった。壁に手を  
ついた時、柑菜の体温より冷たい感触が。十歩、歩いた時、光が強  
くなりだす。

闇穴は高い位置にあるためか、山並みが綺麗に眺める事ができた。黄金色に染まる空には星の輝きも見え始めている。

真下から霧塔の声がして、来た時と同じく出っ張りに足をかけて下り始める。一段、一段と左右の両手足を交互にずらしながら。

「きやあっ！」

あと五段を残す所で、右足を滑らせてしまった柑菜。片手を離れた状態だった柑菜は、残りの手も離してそのまま真下へと落ちていく。

怖さのため、目を瞑る柑菜に鈍い衝撃が加わった。暫くの沈黙と共に、目を見開く柑菜の側に霧塔の姿が。

「柑菜、大丈夫か？」

霧塔が柑菜を受け止め地面へ座り込んでいた。柑菜は霧塔の膝上からのくと、少し頬を赤くしている。

「大丈夫。有り難う」

霧塔は服に付いた土を手で被いながら、柑菜の赤らむ顔に気付かないのか、眼下に広がる村を眺めている。

前方に広がる腰の高さ程の草が、風を受け揺れ動く。草の風波の先、茅葺きの屋根や瓦の家から所々、灯りが浮かぶ。

「ここかな？ 霧塔？」

霧塔の真横に立ち並ぶ柑菜。鮮やかに緑から黄金色に染まる草の先、ひっそりと存在する村に目を配らせる。

「ああ、鴉朱村だ」

懐かしむような、そして、どこか浮かない顔をする霧塔も日暮れる先を眺めていた。

## 其の一（後書き）

この鴉朱村は長くなりそうで、連載というカタチにしました。  
三万字前後の完結を考えています。ここまで読んで頂き有り難う  
ございました。

## ○登場人物○

天宮柑菜

（あまみや かな）

霧塔葵

（きりとう あおい）

其の二（前書き）

C  
O  
U  
S  
I  
N

## 其の二

「どうかしたか？」

草をより分けて進む二人だが柑菜は村に近付く程、辺りを気にして見回している。

不思議な物を見るようにしている柑菜に霧塔は優しく声を掛けた。

「ん？ ん……何処を見ても初めてみたいで、やっぱり何も感じないって」

村で過ごした記憶がなくても、訪れたら懐かしむ事や何かを呼び覚ますものに出会えると考えていた柑菜は、当てが外れ肩を落としている。

何故自分には村での記憶が無いのだろうか？

と思い出そうとする度に受ける偏頭痛含め、期待を寄せていたようだ。

腰の高さまであつた草を抜けると霧塔は、前を歩く柑菜の右手を自分の左手で握った。

そんな霧塔に柑菜は村へ向けていた視線を戻すように、少し前を歩き白いシャツに広がる肩幅の先、夕日に照らされる顔を覗いている。

「急じゃなくても、ゆっくり思い出せば良い」

振り向かないまま前を見据えて歩く霧塔は、夕日だけではない赤みが顔にあるように見える。

普段、何処となく冷たい印象がある霧塔の言葉に柑菜は驚きなが

らも、嬉しいのか口元には笑みがあつた。

「うん。そうだね」

無愛想な霧塔らしい気遣いを受け入れるよう、その手を強く握り返している。

お互い付き合っているとはいえ、まだキスを数回交した関係で深くは知っていない。霧塔が柑菜に合わせているのか、距離を置いていた。

友達や兄妹のような曖昧な関係である。今回の鴉朱村への旅行で少しはお互いの距離が縮まる、そんな期待も僅かに柑菜は考えていたのだ。

やはり恋人としていたいのか今、目の前を歩く霧塔に心が高鳴るのを照れ隠している。

茅葺き屋根の家は遠目で見ていた時より、近付き見れば玄関先は荒れて野花が行く手を阻んでいる。

雨風にさらされ白塗りから黄ばんだ土壁も剥がれ落ちたりしていて、人の気配は窺えない。

廃墟同然である。

間隔を空けて建ち並ぶ家を見ても、同じ状態であるのが解つた。

粒手の砂利石を踏みしめながら二人は奥の道へ進んで行く。

辺りに外灯らしい物はなく、今沈む夕日が去れば暗闇が訪れてしまふ。その前に人の住む民家に入る必要があつた。

程なく歩いて廃墟を通り過ぎた頃、木々が一段と道を囲む辺りに鮮やかな赤と白混じりの浴衣を着た子供が見えた。

二人が近付くとその子供も、その姿が見えたのか道の真ん中で手

を振っている。

黒髪におかっぱ頭という肌の色白さもあり、古風な日本人形のようである。

「葵お兄ちゃん！」

後、二・三步という距離で女の子は履いた黒い下駄を小気味好く鳴らして、霧塔へ両手を広げ抱きついてきた。

少し勢いもあり、反動を受けながら霧塔は立ち止まり、抱きつく女の子の頭を撫でている。柑菜は暫くその二人の様子を見ていた。

「元気にしていたか？ 鈴」

自分の名前を呼ばれた女の子は、夕日のためか本来の遺伝のものが色素が落ちた薄い茶色の瞳孔をしており、二重の大きな目を輝かせて笑っている。

「鈴は元気だよ。そっちの人は誰？」

霧塔の腰に抱きついたまま、横目で側に立つ柑菜を見上げている。まだ無垢さが残る九から十二歳に見えた鈴に、柑菜は優しく微笑んだ。

「私は柑菜。天宮柑菜っていうの。よろしくね鈴ちゃん」

「天宮？」

鈴は霧塔の体を跳ねるように離れ、同じ視線になるよう屈み話す柑菜の顔を不思議そうに見ている。

さつきとは違う鈴の様子に柑菜も気付き、何か気になる事がある

のだから？

と聞こうと思った時。

「もうすぐ日が暮れる。鈴、家まで案内してくれるか？」

霧塔が遮るように鈴を促した。その言葉で我に返ったように、鈴は元通りの笑顔を二人に見せて先を歩きだした。

時折、二人の様子を見るように振り向きながら下駄の音を先導のように鳴らしている。

「ねえ？ 霧塔、鈴ちゃんって妹？」

自分についての事はあえて避け、鈴が“葵お兄ちゃん”と言った部分が気になり、聞く柑菜。

霧塔は横目で柑菜を見ながら、前を楽しそうに歩く鈴について話し始めた。

「鈴は従妹になる。母の妹、つまり俺の叔母さんの娘だ。鈴はあの通り幼くまだ十歳だ」

道行く辺りの木々の葉が風に揺られ、ざわめいている。

「初めて聞いたわ。お母さんと村を出たと言わなかったから。親族も出て行ったのかと思った」

目を丸くしながら、柑菜の声が大きくなった。

「鴉朱村で霧塔家は村長の役割を果たしていて、まだ残る民家と共に今は叔母一家が跡を継いでいる。それも後少しの話だが」

鴉朱村に行く事が決まり、霧塔は叔母一家に暫くの民泊をお願いしていたのだ。

柑菜には電車内で知り合いの住む所へ泊まる事を伝えていた。

その知り合いが叔母宅で村長宅だとは思ってもよらず、ただただ驚くばかりの柑菜である。

やがて三人の歩く前に軒先の灯りが淡く見えだした頃。

辺りは明るさを失い、闇間に覗かせた月明かりが足元にある白石の砂利を照らし、微かに光るような道が見えた。

「あつ！ あそこが鈴の家だよ！」

一際輝く灯りが、他の灯りに囲まれるようにして奥先に構えている。

鈴は下駄の音を弾ませて走りだした。振り向き二人へ手を振りながら。

「二人共、あと少しで鈴の家だよ。ほら、早く！」

遠ざかる声に二人は顔を見合わせ笑っている。あれから何時間も歩き鴉朱村まで来たため、足が疲れ歩くのもやっとであった。

特に柑菜は少しも疲れた様子を見せない霧塔と違い、何度も立ち止まり足を休めている。安堵したのか柑菜は特に嬉しそうだ。

「やっとついたね霧塔」

「ああ」

枯れた竹で敷地を囲まれた大きな家の軒先下では、灯りに照らされ鈴が手招きをしている。

玄関先まで続く四角い敷き石の道を暫く歩き、二人は鈴の前までやってきた。

柑菜は広い庭先に整えられた松の木も見えて、鴉朱村では豊かな家に当たるのだろうと考えていた。

「いらつしゃい。ここが鈴の家だよ。お母さん達は夜の見回りに行つたから、先に上がって休んでね」

鈴は両手で格子の硝子戸を開け、二人を招き入れた。中は軒先以上の光があり、二人を出迎えている。

広い玄関先には清潔を保った白の割烹着姿の家政婦が立っており、二人にお辞儀をすると部屋を案内した。

鈴は晩御飯のお手伝いをするため、そのまま台所に入っていく。

霧塔は懐かしいのか辺りを見回して、家政婦から二階を使うようにと聞き奥にある階段を上りだした。

まだ若い二人を氣遣つてか、柑菜には一階の庭と村が見渡せる客間に通された。

「それでは私はこれで。鈴お嬢さんが後からお茶をお持ちしますの  
で、晩御飯までゆっくり体を休めて下さい」

にこやかにお辞儀をして家政婦は部屋を後にした。柑菜は部屋に鞆を置くと、古めかしい室内を見ている。

天井は今では珍しい板張りで、床間には綺麗なお花がいけられている。庭先を見ると部屋の明かりが漏れているのが解つた。

淡く浮かぶ月の色のように溶け込む闇間から、虫の鳴き声が聞こえている。

柑菜は縁側の側まで来ると座り込み、そのまま横になった。疲れ

もあつて、眠りに誘われそのまま両目を閉じた。  
体を埋める井草の畳は庭先から入る風もあり、良い匂いがし柑菜を包み込んでいる。

「柑菜さん、お茶を持って来たよ」

深く寝入った頃、鈴が部屋を訪ねてきた。手にしたお盆の上には、喉を潤す冷えた麦茶を入れた硝子の湯飲みと、おしぼりが一つ。

柑菜の寝入る姿を見た鈴はそつと部屋の中に入り、漆塗りの黒机にお盆を置いて側へ近付き、柑菜の顔を覗き込んだ。

「やつぱり……」

何かを言いかけたその時。鈴の背後で人の気配がした。

振り返ると見上げる先に霧塔の姿があり、鈴は元通りの笑顔を見せて疲れて寝ていると伝えた。

「そうか。確か隣には布団が敷いてあったな。今日はこのまま寝かせてやつてくれ」

霧塔は鈴から柑菜を遠ざけるように、抱き上げて部屋を後にしようとする。

鈴は立ち上がり、それが良いと言う一方で何処か昔とは違う霧塔の様子に戸惑いを覚えた。

「ね、ねえ？ 葵お兄ちゃん、鴉朱村には同窓会のため戻って来たんだよね？」

その声に霧塔は立ち止まった。鈴を背にして、振り向く事なく“ああ”と答え、隣部屋に入って行く。

抱えられた霧塔の腕の中で眠る柑菜を見送りながら、鈴の顔に笑顔は消えていた。

鴉朱村では珍しい外部からの来訪者、何かが起こりそうな予感そんな胸騒ぎを鈴は感じ始めていた。

闇夜の二十時を過ぎた頃、三人を見守るように虫の鳴き声が続くまでも聞こえていた。

## 其の二（後書き）

鴉朱村、時期は少し早めの夏が舞台になっています。完結頃は季節に合う夏頃にしたいなと思っています。

ここまで読んで頂き有り難うございました。

## ○登場人物○

霧塔鈴

（きりとう　すず）

其三（前書き）

m  
e  
m  
o  
r  
y

### 其の三

空から照りつける日差しが暑くて、夏蝉が鴉朱村のどこにいても聞こえた頃。

まだ柑菜が十五歳の中学三年生で、来年には卒業を迎える年の夏の日。

「明日から夏休みだね？ 柑菜？」

切りそろえた黒髪、おかつぱ頭の少女が柑菜の背後より抱き締めた。

冗談でも気の緩んでいたため、柑菜は動揺し顔を少し赤らめて驚き、抱きつく少女を睨みつけている。

「夏！ こんな時に冗談は止めてよ！」

“夏”と呼ばれた少女は悪戯な笑みを向けて離れる。そんな二人の後ろで、黒髪の三編みを左右の両肩に乗せた少女が笑う。

「百合まで！」

柑菜はそんな二人に呆れた様子で顔を更にこわばらせた。夏は少し驚かせただけだと言い、大声を出す程の事ではないと柑菜に落ち着くように促す。

三人は放課後の校舎に残っていた。教室には自分達以外はおらず、三階の廊下を歩く生徒や声も少なくなっていた頃。

柑菜と夏が一つの机を挟み、向かい合うように椅子に座る。窓の側に立つ百合は、下校する生徒やクラブ活動の様子を見送り

ながら窓を閉め、二人の側に座った。

夕日の明るさに教室の電気は消していた。白い制服が透き通り、色が染まるように黄金色混じりの赤と影の黒が三人を包み込む。

「それで？ 話って何かな夏？」

柑菜は先程の事もあるのか、少し頬を膨らませながら話す。百合は静かに見守っている。

夏は二人の顔を交互に見ると、側に置いていた黒鞆から何かを取り出した。机に置かれた物に二人は夏の顔を見る。

「お守り？」

柑菜は以外な物を見たためか目を丸くする。そこには、朱色の生地に銀系で模様を施されたお守りがあった。

拍子抜けのような二人の顔を見て楽しそうに夏は話し出した。

「そう！ でも、これはただのお守りじゃないの！」

妙な事を言う。

今の時代、お守りなど何処でも売られている品だ。

柑菜には普通のお守りにしか見えなかった。そんな様子を察しながらも夏は二人に説明する。その両目は輝きを増して。

「学校の噂を知ってるよね？」

「鴉朱村の少女ですか？」

百合は不意に出た夏の言葉に早く反応した。柑菜は知らないのか

二人の顔を見る。

「そう！ ん？ 柑菜は知らないの？」

不思議な顔で見る柑菜に対し夏は、大袈裟に溜め息を一つし説明を続ける。

鴉朱村中学校には昔から語り継がれる話しがあった。けして顔を見る事のない少女。

自分達と同じ制服を着ている事から生徒ではないかと噂され、顔が見えないのは髪の毛で顔が隠れているからと。

そして少女と出会った者は忽然と姿を消すのだと。何処にでもある怪談話しだ。

忽然と消えた者が本当にいるのか、何故詳しく少女の容姿が語られるのか怪談だからなのか。噂だけが広がっている。そんな話を夏は面白く話す。

柑菜と違い、夏はこの手合いの話しが好きだった。呆れ顔をし柑菜は大事な話しがそれ？

と不機嫌そうに聞く。そんな柑菜を遮るように百合が小声で何かを呟いた。

「えっ？ 何？ 百合？」

聞き取れない柑菜は百合を見ながら聞く。何処か普段の百合と違うように感じるのは夕日のためか？

そんな事を思い、憂鬱そうな百合を見ている。

「鴉様の財宝……」

今度は聞こえる声で百合はうつ向き加減に答えた。その視線はお守りを見ている。

柑菜は聞き慣れない言葉に不気味さを感じ、同じくお守りに視線を落とした。

「百合は知ってるみたいね」

夏は何がそんなに楽しいのか笑顔だ。見慣れている顔なのに何だか寒気を感じ、柑菜の息を飲む声が教室に響く。

その少女と同じくらいに噂になっているのが、助かる方法だという。

その少女の持ち物にはお守りがあり、その袋の中にある紙には何か文字が書かれていると。それを解読すれば助かる。そう話し終えた。

何を話すのかと思い、見守り噂話を聞き終えた柑菜。その瞬間、血の気が一気に引くのを覚え冷汗が滲む。

真夏の暑さとは違う汗が柑菜の制服に染み込んでいく。

先程の話しを確かめさせるように置かれたお守りは、所々ほつれも見える。中には何かあるらしく、膨らみがあった。

「夏これは？」

柑菜の表情は次第に曇り出すが、夏の顔は耐えず笑顔が浮かぶ。そして、躊躇する事もなく噂のお守りで昨日廊下で拾ったと、そう答えた。

柑菜は冗談か悪ふざけだと思い、椅子から立ち上がると“帰る”

と伝え立ち去ろうとする。

自分の黒鞆を持ち上げようとした柑菜の手首を夏は力強く掴んだ。

その力は驚く程力強く、 “痛いっ” 柑菜にそんな言葉を出させた。

夏は先程の笑顔とは違い真剣な眼差しで柑菜に “試さない？”  
そう聞く。

何を言っているのか理解出来ず、夏から今は怖さだけを感じ、柑菜は手を振りほどき “帰る” と答えた。

「そう……」

少し残念そうに柑菜の手首から手を離すと、百合も帰るのか立ち上がる姿を夏は確認していた。

「私は帰りに職員室寄るから、二人共先に帰って」

夏はお守りを掴みながら手を振る。

元通りの夏の様子に柑菜は、 “また明日” と伝え教室を後にした。

余り聞きたくない話だったためか、普段踏み慣れた廊下も軋む音が不気味に聞える。

すでに人の姿は残されておらず、早足に階段を下りていく。

「柑菜ちゃん」

そんな後ろを慌てて百合はついてきた。柑菜は隣を歩く百合に、先程の話を紛らわすよう話しかけた。

「百合、夏休みにはお姉さんが一度、戻ってくるって本当？」

百合は頷きながら嬉しそうに満面の笑みを溢している。

姉と言っても、一卵双生児らしく歳は同じで、鴉朱村から離れた中学へ寮生活を送っていると聞いていた。

自慢の姉なのか、よく二人に写真を見せては話している。

「うん。今年は二週間こっちにこれるって」

待ちどおしいのか両手に抱える鞆で、頬が赤く染まる顔を隠している。百合の肌は色白もあり、感情が高ぶると顔に出ていた。

やがて二人が一階に着いて、各自の下駄箱から靴を取り出した時。

真後ろにいた百合が教室に忘れ物をしたと言って、先に帰るよう柑菜に伝えた。

来た階段を戻るように百合は手を振りながら柑菜の前から姿を消していく。

柑菜は先程の話もあり、一緒に付き合い戻る気は無かった。黒い皮靴を履くと正面出口の扉に手をかける。

「そっといえば……夏の“試す”って何だろう？」

ふと頭によぎる言葉に足を止めて。でも、たちの悪い悪戯と思い家路についた。

夕日が照らす校庭を歩きながら、まばらに見える学生達と同様に。

その翌日、学校からの急な知らせが耳に入り、柑菜は夏と百合が行方不明だと担任から聞かされた。

鴉朱村に住む人も皆で手分けして搜索したがそれ以来、二人の消息が掴めないままであつた。

小さな村での事。

色々な噂も広がるが、そのまま柑菜は卒業を迎え村を離れていた。若い頃の記憶か、柑菜は忘れるようになる。正確には、その頃から記憶がおぼろ気であつた。

「柑菜さん。柑菜さん！」

誰かの声が耳元で大きく聞こえ、柑菜は重いまぶたを開く。視線は空をさ迷い、部屋の隅々まで配らせている。一体、何が起きたのかと暫くしてから体を起こした。

今まで体を覆っていた掛け布団が無造作に折り畳まれる。手で布団を掴みながら鼓動が早まっているのが解っていた。

「夢？」

柑菜を偏頭痛の痛みが再び襲う。右手で頭を押さえるようにした時。

「大丈夫、柑菜さん？ 随分、うなされていたよ？」

声の方を振り向くと、傍らで正座をしながら見守る鈴がいた。柑菜は少し驚いた様子を見せたが直ぐ様、平常心を取り戻して幼い鈴を心配させまいと笑顔で返した。

「鈴ちゃん、私はあれから寝てしまったのね？」

改めて部屋を見回しながら、自分の置かれた状況を把握する柑菜。鈴は疲れ寝ていたようで、今まで起こさないでいたと話しながら、昼の日差しを受ける障子を開け始める。

部屋の中を自然の光が入り込み、柑菜は眩しいのか目を細めた。鈴は手慣れた様子で柑菜に身支度が終われば、皆でお昼を食べようと伝え出て行った。

「あの夢……昔の？ まあ、今はいいか。鈴ちゃんに教えて貰った洗面所に行こう。トイレもしたいし」

柑菜は夢を振り払うようにし、部屋を出る。霧塔はすでに起きており、鈴の両親には一通りの挨拶は済ませたと柑菜に話す。

また行き違いになったらしく、昼の食卓で鈴の両親に出会う事はなかった。

鴉朱村も夏休みの時期で鈴も学校は休日。まだ残る民家の子供達と遊びに出かけて行く。

霧塔と柑菜は同窓会の約束があるため、二人で学校へ向かう事にした。

鴉朱村の祭りは同窓会より二日後に行われるようで、二人にとっては暫く散策も出来るようになっていく。

そのため、旅行鞆に色々身支度の用意もしていた。食事を済ませ、外に出た二人は霧塔家から裏道のような少し傾斜のある細道を歩き出す。

「こんな道がまだあったんだね？」

草が足元から段々と上半身まで隠れるようにあり、側には森があ

る。

少し高い位置から見る霧塔家は丁度、柑菜が寝ていた部屋で障子の開いた中まで見えた。

前を黙々と歩く霧塔に柑菜は立ち止まるのをやめ、その後ろにくるように歩き出す。

鴉朱村は霧塔の方がまだ詳しく、道を決め歩く事を柑菜には出来なかった。

きつと見失えば迷子になる事は間違いないために、柑菜は霧塔の背後を見失わないよう気をつける。

そんな二人を見送るような鳴き声がし、頭上を一羽の鴉が旋回し飛び去っていく。

### 其の三（後書き）

○登場人物○

相沢夏

（あいざわ なつ）

松井百合

（まつい ゆり）

其の四（前書き）

e  
l  
e  
m  
e  
n  
t  
a  
r  
y  
  
s  
c  
h  
o  
o  
l

## 其の四

まだ人通りがある痕跡が草花の踏みしめ具合で解り、獣道を進んだ先。傾斜が終わったのか少し拓けた道に出た。

平行に体が保てる目線には、先程までいた鴉朱村の様子が眼下に広がっている。

「柑菜。あそこに屋根が見えるだろう？ あれが小学校だ」

一息入れる霧塔が柑菜の背後で、眼下の鴉朱村とは反対方向を指さしている。

その声に振り返り、指さす空を見上げた先に茶色い木造建ての校舎が森の間から見えていた。

拓けた場所からは整備されたように草花が抜かれ、剥き出しの黄色い土道が続いている。

その道を二人は辿るように再び歩き出す。暫くすると前方から錆びた物音が聞こえてきた。

その音が気になり、霧塔の背後を歩いていた柑菜は覗き込むようにして横から顔を出す。

視界には前方から白い自転車に跨り、ゆっくり進む人の姿が映り込む。

自転車は二人の前まで来るとブレーキ音と共に止まり、乗っていた男が声を掛けてきた。

「珍しい顔だな。客人かい？」

気さくそんな顔をみせる男は、都会でも見慣れた薄い青色の半袖の服と黒いズボンを履き頭には黒い帽子がある。

警察官だ。

錆びた車輪から歪な音がするのを聞き慣れた様子で気にも止めず、二人の顔を珍しそうに覗き込む。

「昨日、この村に来ました。霧塔家にお世話になっています」

霧塔は簡単な会釈を交している。「霧塔家」の名前を聞くと警察官は“ああ”と事情を知る様子で、頷く。

余り遅くなると灯りがこの辺りには無いため、早目に家へ戻るようにと促した。そして、再び自転車に跨り二人の横を通り過ぎて行く。

「私達の事、鈴ちゃん達から聞いたのかな？」

手を振りながら立ち去る警察官の後ろ姿を見ながら、柑菜は不思議そうに頭を少し傾ける。

「小さな村だからな」

再び霧塔は歩き出す。

柑菜も元通り向き直して、その後ろを歩く。見上げる空は薄く赤みがかかり出している。

鴉朱村の小学校の敷地内には中学校も一緒に建っている。村にいる子供の数も昔から少なく、運動会など何かの催しは一緒にしていた。

二人が訪れた時もそれは相変わらずのようで、古びた校舎が二つひっそりと存在している。

今回の同窓会は“小学校”でとあったが、卒業式も合同のため、当時の小中同卒生が集まるのだらうと思っている。

二人が懐かしむように小学校の両開き扉前に佇む。何年経つのか、柱から壁までは古めかしい木に年輪と傷が浮かびあがる校舎。

柑菜は校舎を見ても村で過ごしていた頃の記憶が戻らず、少し残念そうにするが直ぐに顔を緩ませている。

年代的な歴史を感じる物には興味があるのだらう。古びた両扉を開くと玄関先になり、四角い下駄箱が高さ五段程で広がって列をしている。

その間を通り抜けるように二人は前へ進む。途中、足元で光る何かを見つけ柑菜は立ち止まり拾いあげた。

霧塔は足音が止まったのを気にして柑菜の方へ振り向く。柑菜の手には白い髪留めがあり、それを眺めている。

近づく霧塔が、その髪留めについて問う。柑菜にも何故、これが落ちているのかと首をかしげ霧塔の顔を見上げた瞬間。

「あつ……」

柑菜の顔が一瞬、怖る。その視線は霧塔の顔ではなく、その背後の存在に向け。

霧塔はその様子を見て直ぐに振り返った。そこには、色白の若い女性が立っている。

校舎内に入り込む夕日が映える長い髪を肩まで伸ばして。白いワンピースに、手には鞆を大事そうに抱え込む。

「誰も来ないのかな？　って思ったけど、貴方達も同窓会で来たの？」

少女のように甘い感じの声が校舎に響き渡り、無邪気な笑顔を見せる。二人には見覚えのない顔であった。

「俺は霧塔葵。こっちは天宮柑菜」

「私は蒔野都です」

蒔野と名乗る女は二人に送られた招待状を同様に所持しており、確認させるように鞆から取り出す。

「誰も来ていないの？」

柑菜は校舎奥を気にした様子で仕切りに見回している。予定時間は四時からだが、二人が着いた時には十五分前。

霧塔と柑菜は、まだ来る者もいるのではないかと、そんな風に蒔野を見ながら考えていた。

到着したばかりの二人は少し中の様子を見たい事もあり、土足のまま上がり入る。蒔野も付き合い、校舎内を一緒に歩き出す。

ある程度の事情を蒔野から聞き、三人は一階にとどまる事にした。正面口から近く、様子が解るために。

職員室の扉を開き入ると、人気を失った空間が寂しげに夕日を窓から受け入れていた。

霧塔は扉付近のスイッチを入れると、何度かついたり消えたりしながら天井の蛍光灯が光を取り戻す。

奥に進むと、用紙や本など物が机上に散乱している。適当に座れる椅子を探して、埃を払いのけ腰を下ろした。

柑菜は職員室内を珍し気に物色し始めた蒔野を眺めながら、霧塔に小声で聞く。

「同じクラスにいたかな？」

柑菜には蒔野の記憶がなかった。正確には思い出せないでいる。

霧塔も記憶が曖昧で解らないと答え、蒔野の様子をじっと窺う。

二人の会話が耳に入ったのか物色を止めて、蒔野は二人の側に座った。背もたれに力がかかるのか、歪に金属が擦れる音が不気味に響き渡る。

「私、中学では三年一組だったわ」

蒔野も二人と面識がない事には違和感があり、鞆から招待状を取り出し見せた。

そこには同様の内容が綴られているが二組表示の二人と違い、クラス表示が違っている。

蒔野は柑菜の顔を見つめて、来るまでに誰かそれらしい人と出会わなかったのか訪ねた。

柑菜は二人で一時間近く登り歩いてきたが、他にそれらしい人とは出会わなかったと言う。

“そう”とはにかみながら笑顔で答える蒔野に対し、柑菜は何処か安心感を覚え始める。

窓に付けられた白いカーテンが揺れ、風の入り込む校舎内は時折、木造のためか不気味な音が聞こえていた。

柑菜はその度に鼓動が少し早まり、早く帰りたいと考える。  
今、知り合ったばかりとはいえ、同じ年代の女性と話して紛らわすには丁度良かったのだろう。

「私、トイレに行きたいわ。柑菜さん付き合ってもらえる？」

蒔野は椅子から立ち上がり柑菜を待っている。二人が来る前より少し早目に着いてからは、玄関先で待っており我慢をしていたという。

柑菜も不気味な校舎に一人は行きにくいのは解り、一緒に行く事にし立ち上がって霧塔を見た。

それに応えるように頷くと二人を見送り、霧塔は正面扉の出入りを見張るために一人、職員室に残った。

二人は職員室の扉を出ると、正面出口とは逆方向の左廊下奥へと歩き出し始める。

一階のトイレは、廊下の突き当たりを更に左に曲がった校舎角にあるらしく、表示が天井から吊り下げられていた。

古びた木造の廊下からは歩く度に軋む音がし、薄灯りの蛍光灯が天井より規則的に並び二人の足元を照らし出す。

「柑菜さんと霧塔くんって恋人同士？」

柑菜の顔を覗き込むようにして笑顔で歩き話す蒔野。どこでも聞く普通の会話に校舎内の不気味さを和らげる。

柑菜は“一応”と照れ臭そうに答えた。霧塔から同窓会に行く話を聞いた時は半、デート代わりのような感覚で嬉しかったのも事実だ。

何気ない会話をする内に二人はトイレ前に着いた。真つ暗な中を入り口の右側にあったスイッチで明るくする。

左に五つ並ぶ扉の一つを開けると和式のトイレであるのが見える。その内の一つは用具入れのようで、水掃きなど立てかけられていた。

右側の扉付近には顔を映し出す鏡と手洗い場所が。突き当たりに窓が一つあり、裏手の校舎が薄暗く見えている。

白いペンキで化粧されたトイレは所々黄ばんだり、変色している。

「やっぱり少し臭うね」

蒔野は鼻をつく異臭に少し眉を寄せ、嫌悪の様子を見せた。夏休み中、人の手を加えられなくなったため、独特の臭いが中に充満している。

柑菜は蒔野に早く済ませて戻ろうと伝える。首を縦に振る蒔野。

お互い終われば入り口で待とうと言い、一番綺麗そうな奥の用具入れの隣に蒔野は入っていく。

その姿を見届け、柑菜も入り口から二番目に入る。見上げた視界にクモの巣を発見し溜め息を溢す。

早く出ようと済ませ、水流しに足をかけ扉を開く。手洗い場に映る自分の姿は、こんな場所のためか疲れた顔をしているように見え、思わず顔に手をそえ確かめる。

振り払うように水が流れる蛇口をしめ、トイレから出るが蒔野の姿はまだ無い。トイレ内かと振り返り、その姿を探すように扉を見つめる。

一人で校舎にいと、何かと想像してしまい怖さを強くさせる。早く出て来て欲しいのと、気を紛らわすために一人で蒔野の入っ

た扉に向けて出口より話しかける。

「蒔野さん早くしないと戻っちゃうよ？」

勿論、冗談である。

何か言葉を返してくれれば気が紛れる。だが、静寂のままであった。

柑菜は他にも話しかけたが蒔野から返事が返ってくる事は無い。

まだ出会ったばかりではあったが明るい印象を持ち、冗談にも付き合おうと考えていたため“妙だな”と感じ始める。

再びトイレ内に入り、蒔野の入った扉前で声をかける。

「蒔野さん大丈夫？」

お腹の調子が思ったより悪いのか、何かあったのかと心配が頭によぎり始める。だが、返事は無い。

柑菜は本当に何かあったのか？

と扉を軽く拳で叩く。

それでも静寂が破られる声を聞く事は出来なかった。柑菜は扉のノブに手をかけた、その顔は緊張し怖ばりだしている。

「あの、本当に大丈夫？」

横にスライドさせる鍵付きがある事は中に入った時に知っていたが、開けて調べたいと思う行動から手で掴んでいた。

汗ばむ手に力が入る。

意外な事に手前に扉が少し開く。鍵をかけていないのか？

「ごめん、開けるね」

一声伝え、覚悟を決めたように一気に手前へ開き中を見る。  
そこには蒔野の姿はどこにもなく、入る前に見たままの空の状態であった。

「えっ？」

何が起こったかと暫く動揺し視線が泳ぐが、我に返り他の扉を開き調べ始める。用具入れ含め、蒔野の姿は何処にも無かった。  
急いで出口前に行き廊下を確認するが、やはり誰の姿もない。  
薄暗い廊下をただ無言で歩く。その姿を明かりが寂しげに照らし出す。

先に戻ったのか？

そんな考えを巡らし、早足で職員室へ向かい戻って行く。  
二人の時と違い一人では十分、叫び出したくなりそうに鼓動が早まる。

自分の歩く度に聞こえてくる足音と、軋む廊下の音にたまらない恐怖感が襲い始める。

五分程で来た距離も何処までも続くように伸びる感じがする。誰かに見られているんじゃないかと辺りを気にしながら急ぐ。

やがて、職員室前の明かりを見ると駆け寄り勢いよく開く。

冗談にしても酷いと感じ一言、言ってやりたい思いが強くなる。  
柑菜は電気の明るさが強くなる職員室に安堵しながら、今まで味わった恐怖感が怒りに変わっていた。

## 其の四（後書き）

○登場人物○

蒔野都

（まきの みやこ）

其の五（前書き）

e  
n  
c  
o  
u  
n  
t  
e  
r

## 其の五

「蒔野さん？」

勢いよく開く物音が辺りに響渡る。柑菜が飛込むようにして職員室へ足を踏み入れた。

最初に見た時と変わらず静まり返る職員室。蒔野の姿はなく、霧塔の姿も見当たらない。

一人、中を歩き三人が座っていたはずの椅子まで来ると柑菜は再び目を配らせる。

陽が落ち窓からさし込む明かりはなく、山沿いの肌寒い風が白いカーテンを揺らし入る。静寂に包まれる中、柑菜は息を飲む。

「き、霧塔は正面出入り口にいるかもしれないわね……」

奮い立たせるようにして、再び扉の方へ足を向け歩く。

軋む床は相変わらず不気味に足音の後を追う。柑菜は早足で入ってきた方とは逆の扉前まで移動する。

「ん？」

視線が扉の中心に移動した時、扉にはめ込まれた硝子窓に柑菜以外の人影が映り込む事に気が付いた。

その姿に柑菜は背後を振り返る。目の前には一人の女の子が、いつの間にか佇んでいる。柑菜からは後ろ姿しか確認出来ない。

黒いおかつぱ頭に白いセーラ服、膝までの紺地のスカート姿。どうやら中学生らしい。

息を飲み込む音が再び柑菜の喉元から響く。全く人の気配を感じる事がなかったために。

先程、辺りを見回していたにもかかわらず、いつの間にか現れた制服の少女。

扉を背にして柑菜は少女に近付こうと一歩、また一歩と近付く。

「ね、ねえ？ 私は天宮柑菜って言うの。貴方は鴉朱村中学校の生徒さんかな？ いつの間に……」

どの生徒も鈴と同じく夏休みのはず。

夜更けに、この場所へ来る用事があるのだろうか？

柑菜は頭の中でそんな考えが浮かぶ。今だに近付くが、振り向く素振りを見せない少女に不気味さを覚え始める。

手を伸ばせば少女に触れる事が出来る位置で、柑菜は立ち止まった。

少しうつ向き加減の少女。柑菜は視線を少女の顔に集中させる。背後からでは横髪が邪魔をし、顔を覆いよく見えない。

さらに足元まで視線を這わせた。細身で色白の素肌、どこか病弱な印象が残る。

柑菜は少女の右足元、側に朱色の物がある事に気付いた。何処かで見た気がする物。

柑菜は、その脳裏に今日見た夢が浮かぶ。その視線を少女の上半身へ、ゆっくり戻す。

柑菜の全身から汗が滲み出し、呼吸が荒くなりだす。ゆっくりと視線を戻す柑菜に合わせるように、少女も体を柑菜の方へ向け始めたために。

相変わらず黒髪で閉ざされた少女の顔。それが徐徐に振り向く。

「うつ……」

警戒音のように柑菜に偏頭痛が襲う。

その痛みに右手を頭にあてがいながら、無言のまま振り向く少女から後退りをする。

『鴉朱村の少女の話し』

夢の中で聞いた言葉が頭の中で響く。

少女に警戒が強まり、酷く息が乱れ呼吸が早くなっていた。後退り背に扉を打ちつけて、前に迫る少女に脅える柑菜。

「あ、貴方は？」

黒髪が顔を隠す。

ただ、真つ赤な口を開け笑っているのが映り込む。

少女の不気味さが増す姿、人ならぬモノを肌で感じ始める。極度の緊張や息苦しさ、偏頭痛の激しさから柑菜の視界が歪み出す。

足元がふらつく。

やがて少女と職員室内が交互に回るよう、その視界を奪っていく。何が起きたのか解らないまま柑菜は床に倒れ気を失っていく。薄れる意識と霞む視界に少女のぼやけた姿が残り、暗闇が訪れた。

「菜……柑菜！」

遠い場所から誰かが柑菜の名前を呼ぶ声がし、その意識を引き戻

す。徐徐に大きくなる声。そして柑菜の体が揺すられている。深い暗闇から光が見える気がし、柑菜は重いまぶたを開く。そこには見慣れた顔が映り込む。

「霧……塔？」

暫くの放心状態から我に返った柑菜は辺りを見る。職員室内は霧塔以外おらず、あの少女の姿も消えていた。

何があったのか問う霧塔。ただ安堵し、柑菜は両腕を霧塔の背に回し抱きついていていた。まだ震えたまま柑菜は動揺を隠せない。

「柑菜？」

霧塔は腕の中で震える柑菜の頭を撫でながら強く抱き締める。

“大丈夫だから”  
そう促して。

暫くすると落ち着きを取り戻し、柑菜から体の震えがおさまった。霧塔から抱きつくのを止め、体を離す柑菜。

霧塔は目を伏せるようにする姿を見て、優しい声で何があったのかと再び聞く。

柑菜は霧塔の真っ直ぐ見る目に頷き、見たままの事を話し出す。

一通り聞き終えた後、霧塔は今まで正面出入り口の方にいたという。

相変わらず偏頭痛がするのか、柑菜は頭を右手で押さえて壁に寄りかかる。

そんな柑菜の姿を心配そうに覗き込む霧塔。お互いの前髪が触れる位置にきた時、柑菜は目を大きく見張った。

慌てて、霧塔の肩を押し戻す。その顔には少し赤みがある。

いつも通りの元気を取り戻したのか、口調は先程とは違い力強く  
なっていた。

「柑菜？ 本当に大丈夫か？」

「だ、大丈夫！ 蒔野さんこそ大丈夫かな？」

その様子を不思議そうにし、首を少しかしげる霧塔。

その視線は相変わらず心配そうに眺めている。正面出入り口の方  
を見張っていた霧塔は、蒔野の姿や他に通る人も無かったと言う。

もう一度、トイレ含め見てくると霧塔は立ち上がり行こうとする。

柑菜は霧塔の右手を強く握り締めた。

一人でいるにはあまりにも寂しく、先程の事もあり一緒にいたか  
ったのだろう。

立ち上がる柑菜。

霧塔も察してか、掴まれた手を握り返す。手には職員室で見付け  
た懐中電灯を握り、共に蒔野を探す事にした。

灯りがぼんやりと足元を照らす廊下を歩き始める二人。職員室か  
ら左隣の教室内を霧塔は一つ、また一つ電気を付けて確認する。

先程、訪れたトイレ前に来ると、柑菜は出入り口に立ち、霧塔が  
五つの扉を開く様子を眺めていた。

蒔野の姿を探し全ての扉を開くが、やはりいないのか霧塔は首を  
左右に振る。

「お互い迷子になる歳でもないから大丈夫だと思うが、他の階も様

子を見るか？」

他の階は一階と違い、夏休みのためか電気は止められていると蒔野から知らされていた。

柑菜は、そんな場所に蒔野が一人で何のためにいるのかと思うが、探す事に頷く。

柑菜の背後、廊下に面した窓があり、外の闇から儚げに淡く輝く星屑が映り込む。

「柑菜？」

どこか浮かない様子の柑菜を気遣う霧塔。職員室でやはり待つ方が良いのではと。

柑菜はそれは嫌だと首を横に振り、一緒に行く決意は変わらない事を示す。

霧塔の持つ懐中電灯のみが頼りと、トイレ側にある階段を上っていく。正面の出入り口とは逆の位置にも階段があり、上の階へ繋がっていた。

小さな丸い明かりが二人の行く先を照らす。お互いの存在を確かめるようにし、強く手を握り締める。

時折、体重の重みで古い校舎は悲鳴をあげ、耳に嫌でも入り込む。何も見えない闇に溶け込むように、二人の姿も消えていく。

「柑菜。さっきの話し、最後は一人で帰ったのは本当か？」

前を向き続け階段を上る霧塔が、不意に言葉をかける。柑菜は霧塔の背を見ながら“さっきの話し”を考えた。

職員室で少女を見た事や、時野がいなくなった事以外にも、今日見た夢の話もしていた。

その夢。中学生時代の話を言っているのかと思い、柑菜は暫くの沈黙の後、答えた。

「うん。それがどうかしたの霧塔？」

霧塔は相変わらず振り向く事もなく、“そうか”と溢し黙々と歩く。

この時、柑菜は何故、霧塔がそんな事を聞くのかは解らなかった。

再び柑菜に偏頭痛が襲う。その痛みに思わず顔を歪め、一段上がる度に鼓動が早まり始めるのを覚える。

だが柑菜は心配をかけまいと、霧塔の手を強く握るだけで何も言わず歩き続けた。

## 其の五（後書き）

まず、前回更新の「其の四」で登場した人物の名前に誤りがあり、訂正しています。

「蒔野都」が正確な名前になります。

そして、前回で気付いた方もいらっしゃるかもしれませんが、予定の二万字前後の完結には到底なりません。

加えて訂正し、三万字前後の完結を目指したいと思います。ここまで読んで頂き有り難うございました。

其の六（前書き）

the location of the missing ma  
kino

## 其の六

二階も先が見えない暗闇に包まれており、霧塔の懐中電灯の明かりだけが淡く浮かび上がる。

一階と同様に一つ教室を開いては蒔野の名前を呼び、探し歩く。

二人は長い間、暗闇にいたため、目も慣れはじめていた。歩く廊下にさし込む月明かりは、教室の扉側を照らし返している。

各階にある教室はそれ程多くなく、七つ程であつた。迷う事なく進み入る霧塔。その手を握る柑菜も一緒に、教室内に入り蒔野の姿を探す。

二階全てを回り終わる頃。蒔野の姿はここでも見当たらず、引き返す事になった。

静まり返る校舎に二人の足音が不気味に響く。柑菜はふと、外窓を眺めた。

月の浮かぶ様子が見えた先、三階角辺りの校舎が見える。外と同じく暗闇があるが、何かの明かりが一瞬、柑菜の目に映り込んだ。

その明かりに柑菜は驚きの声を漏らし、足を止めて動かない。霧塔を握る手が歩く事を引き止める。霧塔は、そんな柑菜の様子に気付いた。

ただ、外窓を眺め続ける柑菜。

その視線の先を追い、同様に三階を眺める。だが、明かりは霧塔の目に映る事はなく、深い暗闇だけが映る。

「どうかしたか？」

再び柑菜の顔を覗き込むようにして、話を聞く霧塔。

三階に一瞬見えたという明かりを確かめるために、二人は三階の階段へ向かう事にした。

校舎はし字のような建物で、柑菜は角の方で明かりを目撃している。

先程の事もあり、緊張が和らぐ事はないが、ずっと握る手の温もりに何処か安堵する。柑菜は少し顔が緩み、笑顔を取り戻していた。

「まずは、柑菜が明かりを見た方を調べるか？」

「うん」

三階に着いた霧塔は一息入れるように、柑菜の顔を眺める。頷く柑菜を確かめると、再び歩き始めた。

二階と違い、三階の窓からは月が間近に迫り、大きく映る。

やがて一つの教室前に来ると、二人は立ち止まった。霧塔は勢いよく、その扉を開く。

二階の時と同様に教室内やベランダと、懐中電灯で照らすが誰の姿も見当たらない。

一瞬の見えた明かり。目の錯覚もある。

柑菜はばつが悪そうに表情はかたく、黙り込んでいる。

そんな柑菜の手を優しく引き、再び移動する霧塔。違う教室を調べるために。

今だに行方の解らない蒔野。何故トイレから姿を消したのか？

柑菜は、同窓会にも段々と疑問を抱き始めていた。卒業以来、中学校時代のクラスメイトには会っていない。

引越してから、地方へ行った事もあり、現在の住所は誰も知らないはず。

それなのに何故、招待状が届くのかと考えていた。まだ学校へ訪れてから、不可解な事に短時間で出会ったため、闇の不気味さも加わり疑心暗鬼になり出している。

そんな柑菜の心中とは裏腹に、蒔野の姿を探すために次々と扉が開かれていく。

順に二つ・三つ・四つ・五つと開いた時。柑菜は、先程までの静寂とは違う気配を教室から感じた。

鳥肌が立ち、思わず足を止める。霧塔は手を引くが、微動だにしない柑菜に引き戻される。

驚き、柑菜の顔を眺める霧塔。その目に、渋る表情を浮かべた柑菜が映る。

「気分が悪くなったのか？」

「う、うん……」

月明かりの照らす廊下は、教室より明るさが残る。

霧塔は柑菜に待つように言うと、一人教室へと入っていく。廊下に残された柑菜は、なるべく明るい位置に佇み、怖さをまぎらわす。

数分の事とはいえ、やはり真夜中の学校は不気味。教室の窓越しから、霧塔の持つ懐中電灯の明かりが淡く映る。

その移動する様子を外から眺める柑菜。早く戻って欲しいと願い静かに見守っている。

明かりが中心辺りまで移動した時、懐中電灯の明かりが、二・三度、点滅した。

柑菜は緊張し、息を飲んだ。やがて、明かりが消えてしまった。

「霧塔、大丈夫？ 電池切れちゃったの？」

動揺の色を隠せない柑菜の声は、少し震えていた。

扉の方へ近付く。

中は暗闇。柑菜には何も見えない。少しずつ体を中へ入れ、霧塔の姿を探す。

消えた中心へ目をやると、床に転がる明かりが一つ。柑菜はゆっくり近付き、その明かり、懐中電灯を手にした。

霧塔の持っていた物。柑菜はくまなく教室内を照らしたが、霧塔の姿を見付ける事は出来なかった。

廊下に出て同様にくまなく照らすが、霧塔の姿は何処にもない。霧塔の名前を呼ぶ。

闇の静けさに脅える声が木霊した。

再び、柑菜の喉元が鳴る。

まだ調べていない残された教室へ足を向けて、一人で霧塔や蒔野を探す事にした。

見当たらない二人。

一体、二人は何処へ消えたのか。広い校舎を一人で探し歩く事に、限界を感じ始める。

再び一階へ足を向け戻る事にした。その顔には冷や汗が浮かび、表情は険しい。職員室前まで戻った柑菜。

二人がいる事を祈り、勢いよく開く。だが、人の姿は何処にもない。肩を落として正面、出入り口へ移動した。

下駄箱付近にも二人の姿は見えない。柑菜は何度も振り向きながら、外へと出た。

暗闇の中、一人では広く感じる広場の校舎前。数分待つと、柑菜はその場から離れた。来た道を急ぎ足で引き返す。

早く、霧塔家に戻り、二人を捜索してもらうために。  
一人で探すには広い学校。まして、不気味さが増し柑菜の頭痛を酷くさせていた。

夕暮れ時、途中で出会った警察官との場所まで来た時。辺りの草むらが激しく揺れ、その音で柑菜は足を止めた。

懐中電灯をその方向へむける。辺りの闇を取り除く明かり。

「誰？ 霧塔？ 蒔野さんなの？」

微かに震える声。

柑菜の懐中電灯を持つ手も震え、明かりが揺れていた。

その先に、白い服が映り込む。明かりが徐々に上半身を撫でるように辿る。

そこには、うつ向き加減の黒髪、おかっぱ頭の少女が。

その見覚えある姿に息を飲む。声を上げようとした瞬間、強い光が視界を遮った。眩しさから一瞬目を瞑る。

両目を再び開いた時、少女の姿は消えていた。安堵する間もなく、その直後、柑菜に酷い頭痛が襲い始めた。  
あがる息。

上手く呼吸が出来なくなり、その視界が歪み、体が地へ崩れ落ちる。

意識を失った柑菜。

側を転がる懐中電灯。その明かりの先に、人影が映り込む。無防備な柑菜へと、迫る人影が。

其の七（前書き）

a  
l  
b  
u  
m

## 其の七

「何も知らない方が幸せな事もあるのよ」

「えっ？」

「だから、お願い。柑菜ちゃん」

たちこめる霧の中に佇む少女。鴉朱村中学校と同一の白い制服に身を包んでいる。顔は濃霧のためかばやけていた。

その少女と向かい合うように柑菜はいる。先程まで見掛けていた少女とは違い、何処か懐かしさを覚える顔。

少女は柑菜から離れ、足元にある沼地へ足を踏み入れた。濁り、何も見えない沼に少女の体が段々と沈んでいく。

「ま、待って！」

沈む少女に手を差し伸べようと柑菜は急いで駆け寄る。そんな手も虚しく、沼は何事も無かったように少女を飲み込んだまま、水面を揺らし終えた。

柑菜の頬を伝う涙が沼に溢れ落ちる。

「……ここは？」

虫の鳴き声が入り込む見慣れた空間が目映り込む。横たわる体を起こす柑菜。体に掛けられた毛布から抜け出して、障子の開いた庭先に目をやる。

辺りは暗闇に包まれており、時々、蛍の光が淡く浮かびあがった。

「柑菜さん！ 目が覚めたの？」

静寂を打ち消す甲高い声。その声の主へ柑菜は体を傾けた。淡い桃色の浴衣に袖を通した鈴が笑顔を向ける。

柑菜も、いつの間にか白い浴衣を着ており、夜風と共に鳴り響く風鈴の音色が、夏の暑さを和らげていた。

「私は……いつ霧塔家に戻ったの？」

「帰りが遅いから、鈴と駐在さんで様子を覗きに行ったの。そして、柑菜さんが道端で倒れていて驚いちゃった」

縁側に足を出して座る柑菜の隣に、鈴も腰を下ろした。手に持ったお盆を廊下へ置き、冷えたお茶を柑菜に差し出す。

柑菜と霧塔が学校へ向かう途中に出会った警察官が、夜更けに霧塔家へ立ち寄ったらしい。それから学校へ向かい、柑菜を発見したとの事。

それから死んだように眠り続けた柑菜。あれから一日経ったという。

「じゃあ、あの時の警察官が運んでくれたのね？」

「うん」

「鈴ちゃん、あの……霧塔は？ それに……」

口籠る柑菜。

意識を失うまで探していた二人の安否が気になるのか。足をバタ

つかせていた鈴の顔を、真面目に覗き込む。

「葵お兄ちゃん？　今、学校で花火を打ち上げるお手伝いをしてるよ？」

「えっ？」

意外な言葉が返ってきて、目を大きく見開く柑菜。急いで霧塔家に柑菜を運び入れた後、暫くしてから霧塔も戻ってきたのだという。

「蒔野さんは？」

「ん？　誰それ？」

鈴は何も聞かされていないようで、首を傾げている。何がどうなっているのか、柑菜はただ驚くばかりであった。

「そういえば柑菜さん。何で葵お兄ちゃんの事、下の名前で呼ばないの？　恋人なのにな？」

そんな様子に気付かない鈴は、無邪気に柑菜を覗き込む。縁側で語らう二人の様子は、仲の良い姉妹のようである。

「“葵”って女性みたいじゃない？　余り呼ばれるの好きじゃないみたいだから。鈴ちゃんが“葵お兄ちゃん”って呼ぶのには驚いたけど」

突飛な質問に、思わず笑顔が戻る。鈴は頷きながら、不意に立ち上がると、先程柑菜が寝ていた部屋に入り何かを取り出してきた。少し色褪せたアルバムを両手に抱えて、再び柑菜の側へ戻ると、

それを手渡した。

「何これ？」

「柑菜さん、鈴ね“天宮”って名前にずっと気になる事があったの。これは、まだ葵お兄ちゃんが鴉朱村に居た学生時代のアルバムだよ」

手渡されたアルバムをめくると、少し色褪せた写真が並ぶ。現在と変わらない森や、民家が多く健在していた風景も写っている。まだ幼さが残る霧塔の姿も。

そんな中の一枚に柑菜の手が止まった。

「それ、そこに写る三人の一人、柑菜さんじゃないかな？」

鴉朱村の中学生らしい女生徒が三人、笑顔で肩を並べている。いつかの夢で見掛けた姿がそこにあった。

「昔から、鴉朱村で行方不明になった生徒がいる話しは噂になっていて、お母さんから聞いたの。そして、その写真の人達だって教えて貰ったの」

「えっ？」

強い風が吹き抜ける。木々の葉が重なり合う音と共に遠くでは、夜空に大輪が咲き始めた。

闇の色を染め変える物音に鈴の無垢な瞳が輝きを増す。柑菜は静かにアルバムを閉じて、庭先からその様子を眺めた。

「鴉朱村、最後の花火だよ。綺麗でしょ？」

「そうね。……ね、鈴ちゃん。私、もう一度学校の方へ行こうと思うの」

立ち上がる柑菜を下から覗き込む鈴。どこか険しい顔をする柑菜を心配そうに。花火を間近で見るためなのかと問うが、首をただ横に振る。

「向こうには霧塔がいるから大丈夫よ。一緒に戻るから」

家の人が出払い、留守を預かる身の鈴。家から離れられず、心配しながらも玄関先から柑菜を見送った。

闇に溶けるよう白い浴衣姿が消えていく。下駄の鳴る音だけを残して。何かを呼び覚ます鴉朱村の花火は打ち上げられ続けていた。

霧塔家からの裏道を登る柑菜の足元には、手に持った灯りが揺らめく。森の隙間からは所々、祭りのために用意された提灯の灯りが浮かびあがっていた。

夜空の明るさと共に、柑菜の心から暗闇に対する恐怖心が次第に薄れていく。不意に立ち止まった先。鈴と共に眺めていた庭先へ目を配らせた。

「やっぱり……」

どこか哀しげな表情を見せ、再び歩を進める。鈴から聞かされた普段通りの霧塔。

消えた蒔野の行方。そして、何かを思い出した柑菜。三人が居た場所へと。

## 其の七（後書き）

今回は鈴について。霧塔の呼ぶ名前が統一出来ていなかったのので、訂正をしました。

「葵お兄ちゃん」が正しいものになります。

「鴉朱村」は、残すところ一・二話の更新のみとなり、もう少して完結します。

ここまで読んで頂き、有り難うございました。

## 其の八（前書き）

k  
e  
y

## 其の八

学校へ近付く程、花火の物音が耳に強く残る。夜風が柑菜を後押しするように通り抜けた。

冷たい夜風が行く先、囲む森の葉音を鳴らし去る中、前方の木陰に誰か人の姿が映り込んだ。その姿に柑菜の進む足が止まる。

「誰？」

森の間より浮かびあがる影。柑菜の手から差し向けられた灯りが、その姿をぼんやりと照らす。淡い灯りのもと、怪しく笑う少女が一人。

「貴方は……」

見覚えある姿、何度か遭遇している制服の少女であった。強張り固まる柑菜の方へ少女は一步、また一步と近付く。あと少しの触れる位置で少女は足を止めた。

いつもなら気を失うはずの柑菜が灯りをしっかりと握りしめたまま、息一つ乱さず少女を待ったために。

「……そんな格好、もうしなくても良いのよ蒔野さん」

うつ向き加減に佇む少女の肩が、その言葉と共に一瞬震えた。ゆっくりと柑菜の方へ顔をあげ始める。

「もう気付いたの？」

「ついさっきね……」

灯りに映し出された少女。

その姿がはつきり浮かぶ。断念した様子で溜め息を溢すと、髪の毛を掴み取った。おかっぱ頭はカツラで、その下には長い髪の毛がまとめあげられている。

蒔野はそのゴムを外して、元通りの長い髪を下ろした。夜風になびく蒔野の髪。その口元には笑みがあつた。

「この格好、中々似合うでしょう？ 遠目や暗がりなんかだと少女に見間違えるわよね」

「……また、霧塔も近くにいるの？」

その場で制服姿を見せ付けるよう振る舞う蒔野に、柑菜は辺りを見回しながら聞く。

その問いに蒔野の顔が一瞬、険しくなる。先程とは違い、柑菜を見据える目にはどこか悲しむような、憎むような眼差しが向けられた。

「勿論よ。でも、今は花火の手伝いで学校にいるわ。だから、もう少し私と話しましょう？ 例えば何故、私だと気付いたのかしら？ 何かを思い出したの？」

最初に出会った頃と変わらない蒔野が佇む。柑菜は頷くと、浴衣の帯から一枚の写真を取り出した。

「ここに写っている三人は私と、一人は相沢夏。そして、もう一人は松井百合。蒔野さんの名前でもわからなかったけど……この髪留めは百合の持ち物。この写真に写る百合と同じく。そうでしょう？」

百合のお姉さん」

柑菜の差し出された左手の中には、学校で拾った白い髪留めが一つ。蒔野は驚いた様子で、柑菜からその髪留めを大事そうに受け取った。

その様子を黙り見守る柑菜。夜空が時折、明るくなる道では二人の対峙する影が写しだされた。

「この髪留めを柑菜さんが拾ってくれてたのね。気付いてくれるか心配だったけど置いたの……百合の形見を。昔、柑菜さんが発見された時、側にあったものよ」

白い髪留めを愛おしそうに撫でる蒔野の手。名字が変わったのは事実であり、現在は結婚しているのだという。

白い髪留めは昔、行方不明になった柑菜が発見された側にあり、蒔野が妹に贈った品であった。姿が忽然と消えた妹の形見として、今でも大事にしている。妹も大切にしていた物を。

「蒔野さん……」

「全ては柑菜さんに思い出してもらったため。そのあやふやな記憶を取り戻して、あの時、百合に何が……いいえ夏さんも含め、貴方達に何があったのか知りたいから」

感傷を振り払うような蒔野の言葉に、柑菜は辛い顔をする。言葉がつまるのか、握る写真の手を下ろした。

遠い記憶の過去。

曖昧なまま、記憶が刷り変わっているのは蒔野も知っているらしい。

あの日、夏からお守りを見せられた柑菜は確かに帰途へ着こうと今、佇む道を歩いていた。だが途中、柑菜は学校へ戻っていた。再びその姿が見付かったのは、道端で倒れ気を失っていた時。目覚めても記憶が消えていた柑菜を心配した周囲が、あえて強く聞かなかった。

すでに、夏と百合という友達が同じく行方知れずになっていたために。仲の良い事は周知の事、まだ子供の柑菜には酷だろうと。

鴉朱村は犯罪とは無縁で、神隠しやら迷信じみた事の方が噂は耐えなかった。妹の悲報を夏休みを利用して戻った蒔野が聞き、柑菜の存在を忘れずにいた。

鴉朱村が近々、地図上から消えると聞き、蒔野は今回の事を計画したのだという。

霧塔とは柑菜を調べる内に出会い、協力を持ちかけていた。普段から偏頭痛に悩む柑菜を知る霧塔は、記憶が戻ればと承諾した。

まだ村長をする霧塔家の事もあり、柑菜の側にいる恋人の関係も協力者に、これほど最適者もない。

「それで……何を思い出したの？」

「私が覚えているのは写真の事だけ。あとは……ごめんなさい」

うつ向く柑菜に蒔野は深い溜め息を溢す。記憶が戻るかどうか、それは賭けでもあったため。残念そうに肩を落とす蒔野に、柑菜も謝る事しか出来ない。

「もしかしたらって思っていただけ。残念だけど仕方ないわ。百合も夏さんも、あの頃から姿は見えない。一体何処へ消えたのかしら

ね？ 私は明日、鴉朱村を発つから……もう柑菜さんの前にも現れないわ」

蒔野は元通りの笑顔で柑菜に最後の挨拶をすると、手を振りながら立ち去った。

木々の間を規則的に並ぶ灯り、その道へ蒔野の姿が遠ざかる。その後ろ姿を見送りながら、少し寂しそうな表情を見せた蒔野の顔が忘れられずにいる。

「柑菜？ 来ていてたのか？」

暫く佇む背後に気配が一つ。その気配に振り向くと霧塔が佇んでいる。花火の打ち上げも、あと少しで終わるため、霧塔は引き上げる途中であった。

鴉朱村の花火、初日は前座のようなもので、本格的には二日目からになる。夜通し打ち上げられる花火が、鴉朱村の空を埋め尽すのだ。今年はそれも最後となり、一層、綺麗なものになるであろう。

「見に来たのなら、近くで見るか？」

「ううん。夜風に当たっていたら冷えたから、もう帰ろうと思うの……」

「そうか」

二人は霧塔家に戻る道を歩き出す。数分前には蒔野も通ったはず。柑菜は霧塔の背中を眺めながら、何かを覚悟した様子であった。

柑菜が寝泊まりする部屋が見える坂道まで来た時、柑菜は足を休めた。前を歩く霧塔も、下駄の鳴る音が止んだ事に気付く。

「どうかしたのか？」

「蒔野さんとね、さっき会って話したの。もう私達の前には現れないって……」

その言葉で霧塔は全てを悟ったのか、口をつぐんだ。柑菜は、そんな霧塔の方を振り向く事もなく、ただ霧塔家を眺めるだけであった。

「蒔野さんには、昔の事を思い出せないって言ったわ。でも……霧塔、本当は全て覚えているの」

辺りの草木がざわめく中、柑菜の耳には霧塔家の風鈴の音色が届いていた。今にも消え入りそうな音色。揺れる柑菜の心のように。

「何を思い出したんだ？」

霧塔の眼鏡奥の瞳が一瞬、怪しく光る。見守る月明かりに照らされて。

## 其の八（後書き）

「鴉朱村」は次話で完結します。ここまで読んで頂き、有り難うございました。

其の九（前書き）

f  
r  
o  
m  
  
f  
i  
r  
s  
t  
  
t  
o  
  
l  
a  
s  
t

## 其の九

「当時、学校では不気味な少女の噂が絶えなかったよね。古いしきたりのある鴉朱村では、迷信じみた方がよく似合うのよ……大人の都合で」

遠くさかのぼると、鴉朱村では昔から子供に聞かせる話の一つに、嘘か真か解らない物語を伝えている。

“鴉様の財宝”もその一つであった。

鴉朱村の由来には、朱色の鳥居と鴉の存在が大きい。その昔、人がそれ程、住んでいない山には鴉が大群をなしていた。

遠くからでも、空や山をおおう漆黒の鴉の姿が確認出来る。

鳴き声一つにしても、しゃがれた声が響く山は不気味だと、誰も寄り付かない。

ある者は災いあるものだと言われ、またある者は山には隠し財宝があり、それを見守る存在なのだという。

試しに欲にかられた者が手勢なり、山へ行ったが誰も戻らない事もあったのだと。

やがて時は流れ、土地開発などで山上にも人の手が入るようになる頃。祈願の意味も込めて東西南北に朱色の鳥居を建てた。

煩く鳴く鴉の群れ。

それがいつしか少なくなっていくという。やがて一人、また一人と住み始めた村人は、鴉朱村を神聖な場所として崇めた。

悪さをする子には、良い薬だと怖い物語を。まだ何も知らぬ子には、悪に染まらぬようにと聞かせた。

柑菜達が居た当時は、誰が最初に語りだしたのか現代風に“鴉朱村の少女”とカタチを変え、人々に恐怖を植え付けた。迷信と片付けるには真実味が残るように。

迷信を信じる者。

信じてない者。

鴉朱村では、そんな噂話しが絶えない。

「夏や百合が居なくなった日、鴉朱村ではもう一つ悲しい事があったよね？」

霧塔の目を見据える柑菜。風が吹き抜ける度、はおる浴衣の袖がなびいた。森のざわめく音が強くなる。

そんな柑菜から向けられた視線を交すように霧塔は押し黙り、霧塔家の明かりに目を配らせている。

体の芯を冷やす夜風の冷たさの中。無表情で、どこか冷めた霧塔の横顔を、ただ眺めていた。

「あの日、霧塔のお祖母ちゃんが亡くなっていたよね？ でも、私達が行方知れずになっていて、村の大半が搜索するようになっていた」

小さな村での事、大概は村人が総出で何かをする。

霧塔家の通夜もそうであったが、夜更けになっても戻らないという相沢家、松井家、天宮家の親族の申し出に皆、動く事となった。

前方もよく見えない暗闇の中、手に灯りを各々持ち、山を搜索する。灯りが心許無い暗闇。

やがて村人の足は立ち止まり始める。日の出と共にないと、二次

遭難の危険もあると。

暗闇では無理だと悟った村人は、一度止めて早朝から再度、搜索をする事にした。

そんな中、道端で倒れる柑菜だけを発見していた。何度か探しに通ったはずの学校への道で何故いたのか、疑問を残しながら。居なくなつてから二日目の事である。

「ね、霧塔。当時には解らない事が、時を経て理解する事もあるみたいなの」

寂しげに消え入る声に霧塔は何の反応もみせない。柑菜の深い溜め息が風に紛れ込む。

すっかり冷え切った体を擦りながら、話しを続けた。

「夏が“お守りを拾った”と言った部分、思い出していくと何か妙で……ううん、違和感があつたのね。だって、少し前にも何処かで見た気がするから」

当時には気付かなかつた事。自らの記憶を辿る柑菜は、行方不明になる前日の事が、はっきりと思い浮かんでいた。

丁度、霧塔と佇む前の霧塔家を眺めた時、それは徐々に確信へと。

学校へ繋がる道は霧塔家からの裏道と直接、森の間を切り開き整備し、造られた道がある。

大概是整備された道に行くのだが、霧塔は実家から近い裏道をよく使っていた。村長である霧塔家、村に住む者なら誰もが知っている事。

時折、その裏道を使って、通る者も勿論いる。行方不明になる前

日の柑菜も、そんな一人であつた。

普段より少し早起きをした柑菜。普段、あまり通らない霧塔家の裏道を行く事にした。

まだ朝霧が立ち込める中、ゆつくりと登り始める。

やがて霧塔家に差し掛かった時、足を止めて辺りを見渡した。早朝の澄んだ空気を深く吸い込みながら。

そんな柑菜の眼下に、障子の開いた一室が映り込んだ。視力の良い柑菜には霧の中とはいえ、中の様子がよくわかる。

柑菜と変わらない子供姿と、敷かれた布団上で寝転がるお祖母さん。朝早くから甲斐甲斐しく、お祖母さんのお世話をする少年の姿。柑菜は記憶に留めていた。

この少年は勿論、霧塔家に住む長男の霧塔だ。そして、まだ健在だが、翌日には亡くなる霧塔のお祖母さん。

柑菜は休息も程々に足早く、その場から立ち去っていた。振り返った霧塔と目が合った気がしたために。慌てて、上半身が隠れる草村に身を潜めながら。

「今思えば……それが始まりだったのかもね。私が裏道を利用した、あの日が……」

霧塔は僅かに体を動かす。柑菜の言葉に反応するように。元通り柑菜の澄んだ目を覗く。

今度は柑菜が目を逸らすように、背を向けた。その先の話を拒むように。だが、意を決した声が一つ。

「当時は何気なく覚えていた事。だって、朝早くに寢床にいるお祖母さんの、お世話をしているとしか映らなかったから。孫である霧

塔の手を掴んで、立ち上がろうとしているとしか……解らなかった」

再び振り向く柑菜。

その目には先程までの迷いも消え、前に佇む霧塔を睨みつけている。

月明かりのせいで影になる霧塔の顔。その表情がよく解らない。ただ、柑菜を眺めているようにも、不気味にも映る。

「口話法って知ってる？ 霧塔とは同じ学科が殆んどだけど、違うのもあるよね。そんな中の一つにあった授業よ。口の動きで何を言いたいのか解る事」

柑菜は声を出さずに口を動かす。対峙する霧塔によく解るように。

「あの時、お祖母さんが言ってた事が解ったの。そして、何故、足早に去ったのかも。あの時、振り向く霧塔が……怖かったから」

ナゼ？ アオイ？

ナゼ？ アオイ？

声を押し殺した口話法が語る。当時のお祖母さんの言葉を。

霧塔の腕を必死の形相で掴みながら、霧塔の手に握られた朱色のお守りを取り戻そうとする。持病の心臓病を抑える薬、それを入れた大事なお守り袋を。

お祖母さんの願いも虚しく呼吸が荒くなり、老いた体が重たく毛布の上へ沈んだ。遠くから覗く柑菜には、息をしているかどうかの判断は出来ない。

ただ、偶然なのか急に裏道の方を振り向く霧塔の冷たい目が恐ろしく、慌ててその場から立ち去った。小さくても目立つ朱色のお守

りを記憶に留めながら。

一瞬の出来事、庭先から覗く霧塔の目に柑菜の姿が映ったのかは定かではない。

「夏が拾ったお守り……あれは霧塔が落とした物だったんじゃないの？ 私を追い掛けて」

何処にでもある普通のお守り。確信があるわけではないが、柑菜はそう考えている。

だが、物陰に隠れた柑菜の顔までは解らず、あの時間帯、学校に居た者を調べていたのではないかと。

鴉朱村の校舎に早朝から訪れる生徒はまばらであるが、偶然にも夏や百合も早くから来ていた事を柑菜は記憶していた。

夏はその時、何処かで拾ったのではないかと。

「違うかな？ 霧塔？」

「……」

「私が夏達と最後に別れた日。あの時も霧塔は居たんだよね？ あの校舎に」

ただ黙る霧塔の前に、柑菜の古い記憶が蘇る。空が暁に染まりだす頃、教室で一人座る夏。

先に帰った柑菜と百合の出で行った扉を眺め、溜め息が一つ溢れた。椅子の動く音が床に響く。

夏は側に置いていた鞆を手にして、扉へ手を掛けた。そんな夏が

開くより先に、誰かが扉を動かす。

「百合？」

視界に映る姿、三編みの長い黒髪。見慣れた色白で気さくな笑顔。急いで戻ったらしく、顔は熱り息も荒い。

一息、呼吸を落ち着かせた百合の視線は夏をとらえる。

「良かった、まだ居て。ね、夏ちゃん。職員室に用事があるって嘘なんだろう？ 噂を試しに行くんだよね？」

「……なんだ百合は知っていたの？ 噂の事」

夏の問いに頷く百合。興味深いのか瞳が輝く。百合から柑菜は先に帰った事を聞きながら、二人で校舎の裏手に繋がる扉へ移動する。すっかり、人気もまばらになった校舎。差し込む陽に影が伸びる。“噂”とは勿論、鴉朱村の少女の話だ。

鴉朱村の少女が住むとも、鴉様の財宝の在りかとも言われている場所。なんでも願いが叶うという。

校舎の裏手には深い森が広がり、その何処かに存在すると噂された。山の頂上付近に学校を建てたが、周囲の森まで着工の手は入らず、自然が残されていた。

誰も寄り付かず、迷子にならないようにと普段から出入りすら禁止られた森。

無造作に学校周辺のみ来接する部分をロープで囲まれている。二人は周囲を気にしながら、そのロープ先へと足を踏み入れた。

少し歩いた先で夏は急に立ち止まると、辺りをしきりに気にして

見回している。

「どうかしたの？」

「いや、何でもないよ。誰かに見られている気配がしたから……でも、気のせいよね」

「夏ちゃんも怖いの？」

「なっ、違うわよ！ ほら、行くよ！」

怪訝そうに頬を少し膨らませた夏。勢いよく森の落ち葉を踏みしめて進む音が辺りに響く。空では鴉のしゃがれた声が木霊した。

置いていかれまいと小走りの百合。先程の事が余程面白いのか笑い声が溢れる。普段から強気の夏は弱味を見せない、特に百合の前では。

「あれは、夏と百合？」

再び校舎へ足を運んだ柑菜。遠くで、見知った姿が映り込んだ。その姿を追うように禁じられた森のロープ前へ佇む。

「何で、二人がこの森に？ 見間違いだと良いけど……」

人を呼ぼうか少し迷いながら、柑菜は一人でロープ先へと踏み入れた。樹木に閉ざされた森には陽の光も少なく、見渡す先は深い暗闇。

喉元から息を飲み込む音が一つ。何が待つのか解らない先へ躊躇するよう足が動かない。

「？……気の……せい？」

ふと、誰かの視線と気配がして振り返る。辺りを見回すが、校舎が寂しげに陰を落とし微かに人の声が届くのみ。学校に残る生徒、帰宅する生徒の声が。

柑菜は再び前を見据え意を決し、駆け出した。二人を追うために。

「百合、いつまでも笑わないでよ。ったく……」

「ふふっ」

静まり返る森の中、先程の事で不機嫌な夏が百合を睨みつける。そんな姿も面白く映るのか笑顔を向ける百合。

不意に立ち止まった夏が百合の黒髪に目をとめた。三編みの黒髪、その耳元には映えるように白い髪留めが。夏は手を伸ばすと百合からその髪留めを外した。

「あつ……夏ちゃん、それ大事な物なの。返して？」

戸惑う百合に夏の苛立ちが更に募る。

三人の中でも特に夏は行動的でもあり、よく衝動的な行為がある。思春期頃ならではの子供じみた部分だ。

百合もそれをよく解るため、夏の次の行動を窺っている。腹に据えかねた状態の夏を恐れ。

「何よ？ ただの髪留めでしょう？」

「それは、お姉ちゃんから貰った物なの。だから返して！」

「ちよつ……百合！」

いつもなら夏の気が済むまで待つ百合だが、髪留めへの思い入れが強いのか夏の手へ掴みかかった。その行動に驚きながらも夏は百合を突き放そうとする。

もみ合う二人。

夏はあまりの百合の変貌ぶりに戸惑い、体が後ろへよろめいた。

「きゃあ！」

気迫に圧倒され、何歩か後退った時。足場の固さが急になくなり、夏の体が傾いた。一瞬にして夏の体が地面へ埋もれていく。地面、いや水面揺れる沼に。

見上げる夏に百合の驚く顔が映り込んだ。先程まで歩いてきた森、その暗い陰がおおう中、悲鳴が木霊する。

「ゆ、百合……た、助け……て……」

抜け出そうと、もがく夏を沼はあつという間に飲み込む。夏の恐怖にかられた顔を最後に、水面は静まり返った。

「な、夏ちゃん？　ねえ？　夏ちゃん！」

崩れ落ちるよう、その場に力なく座り込む。今起きた事がよく理解出来ず、水面に叫んだ。百合の悲痛な声だけが寂しく木霊した。

「百合？」

「あ、柑……菜ちゃん……」

二人を追い、森を駆けてきた柑菜は見慣れた姿を地面に見る。涙で頬を濡らす百合を。力ない声に柑菜は直ぐ様、駆け寄った。

「どうしたの？ 夏は一緒じゃないの？」

「柑菜ちゃん、夏ちゃんが……夏ちゃんが」

百合の指差す方を見ると、森の落ち葉と同化するような水面が一つ。よく見なければ誤って足を踏み入れそうだ。

百合から事情を全て聞き終えた柑菜は、目の前にあるものが底無し沼だと理解する。禁じられた森に存在していたのは、財宝でも何でも無い友を飲み込んだ沼。

禁じられた森に着工の手が入らなかった理由の一つであった。辺りを見渡せば、他にもあるかもしれない。

柑菜は一度、学校へ戻り事情を大人に話そうと言う。百合は黙ったまま首を横に振り、立ち上がった。

「百合？」

「柑菜ちゃん、この事は秘密にしてもらえないかな？ 私達の事。何も知らない方が幸せな事もあるわ。だから、お願い柑菜ちゃん」

「え？」

再び沼の水面が揺れ動く。百合が足を踏み入れたために。慌てて引き留める柑菜を、百合は振り向きざまに力強く突き飛ばした。

その勢いで地面に倒れ込む。柑菜の視線の先には、百合の体が沈みいく姿が映り込んだ。最後の笑みを百合は柑菜に向けて。

「な、何で百合？」

「ごめん、柑菜ちゃん。私のせいで夏ちゃんは……だから私も。鴉朱村は小さな村だから、この方がきつといいの。ありが……とう」

「やだ、百合っ、百合！」

柑菜の思いも虚しく、水面は百合を飲み込み静まった。手を伸ばした柑菜は、地面へその手を叩きつけた。その度にくちた葉が舞い上がる。

何度も、何度も。

むざむざ見送る事しか出来なかった事を悔いるように。

「何で、何でよ？ ふっ……うっ……うっ」

一人残された柑菜。

静寂の中に声が轟く。大粒の涙が禁じられた森へ溢れ落ちた。

「っ……痛……な、何？」

急に襲われた目眩と激しい頭痛。

霞む視界に、すっかり日差しが失われた闇の中を誰かが近付いて来る。枯れ葉を踏みしめる音が柑菜に段々と迫る。

あまりの急激な体調の変化に柑菜は、最後までその者を確かめる事なく意識が遠のいた。

それから翌朝早く、学校沿いの道端に倒れている所を発見されていた。手には百合の白い髪留めを握り締めながら。

「私はあの後から、その時の記憶を失っていたけど、百合が死んだ

理由、現在はなんとなく理解しているの。故意ではないとはいえ、夏は死んだもの。蒔野さんの進学やご両親、色々考えても噂が広がりやすい鴉朱村では生きにくいから」

罪の意識にさいなまれたのも勿論だろう。百合は神や宗教を重んじる傾向があつた。

二人が居なくなつた後も鴉朱村では様々な噂が広まつた。相沢家、松井家も程なくして進学や仕事の関係で鴉朱村から離れている。誰も真実を知る者はいない。

「私ね、思い出す内、気を失つた後に見ていた夢を思い出したわ。誰かに背おられて森を歩いているの。その背中の温もりが温かくて……そんな夢……」

「思い出したのは、それで全部か？」

遮るような言葉。

柑菜は少し驚きながらも、元通りの霧塔の顔に安心する。相変わらず風が吹き抜ける裏道。

何分、何時間、それ程までに時間が随分と経つ気がする中、すっかり冷えてしまった体を柑菜は霧塔へ向けている。

「うん。今まで頭にあつたもやが消え、すっきりしているわ」

「そうか」

「な、何するの？」

霧塔は柑菜の返事を聞くなり、柑菜の腕を強く掴み自分の方へ引き寄せた。

戸惑う視線を向ける柑菜は、その手から逃れようとする。だが、霧塔の左腕がすでに腰へ回り、離れられない。

霧塔を見上げる柑菜の目には怯えが残る。

普段からお互いの息遣いが聞こえる程側にも、肌が重なる事もありない距離のために。

全てを思い出した柑菜にとって、目の前に佇む霧塔は甘い恋心を抱くだけの存在ではなくなっている。

蒔野と画策していた事も含めて。

「俺にも柑菜が受けていない授業の一つがある。それを試すのさ、この時を待っていたから。全ての記憶が戻る時を」

「や、め……」

柑菜の耳元で何かを囁く霧塔。

その言葉のせいか柑菜の焦点が合わなくなり、やがて瞼を閉じた。

先程まで、微かに霧塔家から届いていたはずの風鈴の音色は、風が更に強くなり、嘆くように鳴り響く。

力なく崩れ落ちる柑菜の体を霧塔は、しっかりとその腕に抱きとめている。

二人の行く末を見守っていた月。

淡く照らす月明かりが雲の陰に隠れ出した時、裏道に写し出された二人の影もカタチを消して、辺りの闇に包まれた。

「あの時からかもしれないな……」

色白な素肌の頬を一撫でし、柑菜の口許へ霧塔は重ねた。

「……気を失っているのか……」

日差しや人も拒むような湿る森の土。うつ伏せに倒れている柑菜の体を揺さぶるが、意識を取り戻す気配がない。

柑菜の側にある水面に気付くと、霧塔は近くにあった石を掴み、投げ入れた。石は鈍い音を沼に響かせて、最後には静かに沈んでいく。

霧塔は三人の内の誰かが家を覗いていた事に気付き、放課後は跡をつけていた。何処かに落とした、お守りを取り戻すために。

鴉朱村中学校では生徒の数は少なく、仲の良い友達同士もすぐに解る。あの時、早朝にいた者を探り当て、三人を見張っていた。

「底無し沼か」

遠くの木陰から様子を眺めていた霧塔だが、大体の予想はついてる。三人の内、二人は消えているなら残りは柑菜だけと。

誰が拾ったのか解らないが、このまま消えてもらうのも悪くないと再び柑菜の側へ寄った。今、底無し沼に落とせば何も証拠は残らない。

柑菜の腕を強く掴む。不意に、うなだれた柑菜の顔が霧塔の方へ上向いた。

涙を流していたあとが残る顔。その様子に霧塔の動きが止まった。

心臓を患うお祖母さんを、その手にかけたのは進学のため、鴉朱村を離れたいために。

お祖母さんは昔から過ごしている鴉朱村の土地を離れたくないと

言い、霧塔の母親を困らせていた。

少し死期が早まっただけに過ぎないと、冷めた心を持つ霧塔。実行した日、計画は完璧だったのに誤算が生じた。柑菜の存在である。

昔から大人びて、冷めていた少年。そんな霧塔に、また一つ誤算が生じる。

「綺麗な顔だな。誰かのために涙を流すか……」

目を覚まさないよう、引き起こした柑菜を大事そうに背中に抱え、側に落ちていた白い髪留めを拾い、その場をあとにした。

霧塔家の裏手へ柑菜の身を隠し、ほとぼりがさめてから道端へ運んだ。誰かが通るのを見計らいながら。

発見された後、暫くして天宮家が鴉朱村を離れた事を知った霧塔。再び大学で出会えたのは本当に偶然だったが、何故か気になり側にいる。

あれから柑菜が記憶障害に悩まされている話を聞き、それも悪くないと思っていたが、蒔野が現れた。

全てを思い出した時、忌まわしい過去も再び蘇り、あの時、覗き見た者が柑菜だったらと、霧塔は手を貸す事にした。

もう一つの計画を実行するために。記憶障害が治った時、再び催眠療法で記憶を取り除こうと。

「葵お兄ちゃん、柑菜さん！ また会おうね！」

「鈴ちゃん、またね」

「ああ、元気でな」

霧塔家の軒先で鈴が両手を振る。二人は訪れた道を引き返すようにして歩く。柑菜は少し前を歩く霧塔の背中を眺めながら。

何度か振り返り鈴へ手を振ったが、その姿も遠のいた。二人は途中、交通止めになった道のせいで造られたという、正規の舗装道路を行く事にした。

「教えてもらった道、本当に早く着くね。もう、朱色の鳥居が見えるわ。相変わらず大きいよね」

声を弾ませる柑菜。

花火から戻った時、霧塔の腕の中で眠りについていた。体調を崩したという事にされ。

鈴が心配する中、目覚めた朝には元通りで体調の良い柑菜。霧塔は少し早いが予定を早め、鴉朱村を出る事にした。

最後まで入れ違いのまま、叔母夫婦を見掛ける事なく、鈴に見送られ霧塔家をあとにした。

何か言いたそうな鈴の顔が柑菜は少し気になったが、また出会った時に聞くのも悪くないと。

「柑菜、何か思い出したか？」

「ん？ 何を？」

「いや……何も覚えていないなら、いいんだ」

「？ 変な霧塔。そういえば、何で鴉朱村に来たんだっけ？ ま、いいか……」

二人が朱色の鳥居をくぐる時、羽を休める漆黒の鴉が一鳴き。やがて二人を見送るように飛び去った。

澄み渡る青空に吸い込まれるようにして。そんな様子を見上げる柑菜。鴉の遠のく、しゃがれた声が過去を運び去る。

「柑菜？ 置いていくぞ？」

「待つてよ、霧塔」

少し前を歩く霧塔に慌てて駆け寄る柑菜。朱色の鳥居をあとにし、仲良く手を取り合う二人の姿が白い敷石に写しだされた。

その後、鴉朱村からは人が麓に下り誰も居なくなつた廃村として、現在もひっそりと森に存在する。麓で新たな生活を送る者の中には勿論、鈴達もいる。

鈴と霧塔や柑菜が再び出会うのも、そう遠くない話し。今度は、おめでたい席かもしれないのだから。

「蒔野、やり過ぎだぞ。職員室で柑菜の前に現れるなんて。その姿は二回だけの約束だろう？」

「何の話しょ？ 私は計画通り、トイレから抜け出して一人寂しく三階へ直ぐ上がったわ」

「？ …… 何でもない。明日で最後だ」

「そうね」

学校へ続く道端に倒れている柑菜を前に佇む二人。蒔野は、おか

っぱ頭のカツラを外すと、村の方へ去った。

見送る霧塔は、柑菜を抱え上げる。薄暗い道に霧塔の声が一つ木霊したが風が直ぐ様、吹き消していく。

「柑菜が職員室で見た少女は、誰だったんだ？」

二人は霧塔家の方へゆっくり引き返して行く。辺りの木々を揺らす葉音が酷く唸る。この先、柑菜を待ち受ける予兆のように。

“何も知らない方が幸せな事もあるのよ”

鴉朱村に存在する噂話し。

鴉朱村の少女、鴉様の財宝も誰が最初に語ったのか謎のまま、現代に受け継がれる。

鴉朱村で何でも願いが叶うとされたモノ。現在も静かに水面を揺らし、何かを飲み込むのを待っている。“願い”、例えばそれが人の闇でも。

## 其の九（後書き）

「鴉朱村」、最後までお付き合い頂きまして、有り難うございました。

少し秘話（？）をしたいと思います。

まず、現在まで現代短編として執筆した中で、一万字以上の作品はこれが初めてになります。

三万字以上の長編にお付き合い、本当に嬉しいです。

そして、今回の作品ジャンルはホラーですが、初めてのジャンルになります。

ホラーにも、更に色々な言い方が存在しますが、一応、サイコホラーとして執筆しています。

ホラーは勿論、推理や人間心理、サスペンスなど大好きです。今後も執筆したいジャンルの一つです。

また皆様と機会がありましたら幸いです。それでは、ここまで読んで頂きまして、有り難うございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0419c/>

---

鴉朱村 朱色の鳥居をくぐる者

2010年10月14日18時14分発行